

斎藤緑雨の絶筆「もゝはがき」

槌田満文

「僕本月本日をして目出度死去致候間此段広告仕候也」という死亡広告を自ら書き遺した斎藤緑雨は、明治三十七年（一九〇四）四月十三日に三十八歳で病歿した。

この年の二月十日に日露戦争が始まり、三月二十七日に敢行された第二次旅順港口閉塞作戦で戦死して、軍神と謳われた広瀬武夫海軍中佐の東京での葬儀は、緑雨の亡くなった日に行われている。

死亡広告の文案は、緑雨が死ぬ前々日の夜に、かけつけた友人の馬場孤蝶に口述筆記させたものという。孤蝶は「故斎藤緑雨君」(『明星』明治37年5月号)で、緑雨から「既に幸徳秋水君を電報で呼んで居るが、多分は今夜来てくれるかとは思ふが、行き違ふといかぬから、念の為に之れを懐に入れて行って、僕が死んだと云ふ通知が行ったならば、この広告文を幸徳君に托して『二六』『万朝』位でよいから出してくれ」と頼まれたと述べている。いつも寸鉄人を刺したこの毒舌家は、死んでゆく自分をも冷静に見つめていたといつてよいであろう。

緑雨が生前に発表した最後の文章は、親友秋水や堺利彦らの平民社から、明治三十六年十一月に創刊された週刊『平民新聞』紙上に掲載された。第二号から五回にわたって連載された「もゝはがき」がそれで、緑雨最晩年の人生観、文学観をうかがうに足る。

第二号（明治36年11月22日発行）には第一信から第三信まで、第四号（同年12月6日）には第四信から第十三信まで、第五号（同年12月13日）には第十四信から第十七信まで、第六号（同年12月20日）には第十八信から第二十八信まで、第八号（明治37年1月3日）には第二十九信から第三十二信までが載った。

肺患と貧窮に苦しむ緑雨のために、秋水が寄稿させた「もゝはがき」は、平民社に送られてくる緑雨のはがきを一週ごとにまとめて活字化したもので、すでに長文を書ける健康状態になかった緑雨に對する秋水の配慮が見られる。

「もゝはがき」は「晝のしぎのはねがきもゝはがき君がこぬよは我ぞかずかく」(『古今和歌集』巻十五、よみ人しらす)という古歌をふまえたタイトルで、はがき百枚の意が寓されていた。一枚で一信とは限らず、多いときは四、五枚使われたケースもあったが、そ

れでも百枚には達しないままに終わっている。

緑雨の意図は次の第一信に明らかであろう。

「▲鶺鴒にありては百羽搔也、僕にありては百端書也、月や残んの寢覚めの空、老れば人の洒落もさびしきものと存候。

僕昨今の境遇にては、御加勢と申す程の事もなりかね候へども、この命題の下に見るにまかせ、聞くにまかせ、且は思ふにまかせて過現来を問はず、われぞ数かくの歌の如く、其時々筆次第に郵便はがきを以て申上候間、願はくば其儘を紙面の一隅に御列べ置被下度候。

田に棲むもの、野に棲むもの、鶺鴒は四十八品と称し候とかや。僕のも豈夫れ調あり、御坐います調あり、愚痴あり、のろけあり、花ならば色々、芥ならば様々、種類を何と初めより一定不致候。

十日に一通の事もあるべく、一日に十通の事もあるべし。かき鳴らしてふ羽音繁きか、端書繁きか、之を以て僕が健康の計量器とも為し被下度候。匆々。」

「もゝはがき」の内容は「おぼえ帳」（明治30年4月〜12月）に始まる緑雨得意の短文批評であるが、それまでと著しく異なるのは時として口語体によるものが加わっている点であろう。全三十二信のうち六信が口語体で、たとえば次の第二十七信はその短いもの一つである。

「▲いつの年でしたか私の乗りました車夫が、足元へ揃み着いた紙鳶の絲目を丁寧に直して遣りましたから、お前は子持ちだねと申しましたら総領が七つで、男の子が二人あると申しました。」

長いものでは、次の第五信があげられる。

「▲日向恋しく河岸へ出ますと、丁度其処へ鰻捕る舟が来て居ま

した。誰もよくいふ口ですが、気の長い訳さねと或一人が嘲笑ひますと、又或一人がさうでねえ、あれで一日何両といふものになる事がある、俺が家の傍の鰻搔きは妾を置いて居ますぜと、ジロリと此方の頭の先から、足の先迄見下しました。

このやうな問答は行水の流れ絶えず、昔から此河岸に繰返されるのですが、たゞ其時私の面白いと思ひましたのは、見下した人も、見下された人も、殆んど同じ態度に近寄りまして、更めて感に入つた一呼吸の裡に、どちらもが妾の有りさうにも、有得さうにもないのゝ明かな事でした。即ち妾を置ますのを、こよなき驕奢、こよなき快樂としますやうな色が、其どちらも顔一杯に、西日と共に照渡つた事でした。」

二

これら口語体の短章には、人生の残照に近づいた緑雨の虚無感、脱力感といったものが看取される。そこには文語体の警句に見られたやうな緊迫感、切実感がないかわりに、一種やりきれないやうな諦観がにじみ出ていて、無気味さを感じさせないでもない。

次に列挙するような、お家芸ともいへべきかつての筆鋒鋭利な批評的戯文とくらべてみれば、気力筆力ともにその衰えは蔽うべくもなく、緑雨の心身がいかに蝕まれていたかを思わせる。

「○われ今宵、日本一の事をなすべしとて、日本橋の上より川中目懸けて、尿したる人あり。」（「おぼえ帳」明治30年作）

「○一歳の者を以て、十歳の者に比較すれば、実に十分の一なれども、それよりたがひに十年を経たりとせよ、十歳と二十歳は、僅に二分の一のみとは、或道の先輩がしたり顔なるに激したる人の言

なり。興ありといふべし。」〔ひかへ帳〕明治31年作〕

「○寒い晩だな、寒い晩です。妻のナグサメとは、正に斯の如きもの也。多くもこの型を出でざる受答への器械のみ。之に由りて、世の寂寥を忘るといふ者あり、げに能く忘るべし、希望をも忘るべし。」〔眼前口頭〕明治31年作〕

「○今の作家は、今の批評家のために毫も開発せられたることなし。されども今の批評家は、今の作家のために常に生活するなり。」〔罪々刺々〕明治32年作〕

「○原稿の催促と、借金の催促と、挟み撃たれて首も廻らずと一作家の啣ちけるに、一方は収入でせう、一方は支出でせうとずつと摺寄りて、どちらも催促であつて見れば、先方同志差引にさせては如何です。」〔日用帳〕明治33年作〕

「○これは即ち、与へよの義なり。請求の声、天地に漲るによりて、一年のくれとはいふとぞ。」〔両口一舌〕明治33年作〕

「○按ずるに筆は一本也、箸は二本也。衆寡敵せずと知るべし。」〔青眼白頭〕明治33年作〕

しかし「もゝはがき」でも、文体のいかんにかかわらず、緑雨の觀察の鋭さは失われていない。たとえば、第十五信に「▲拭掃除も面倒也、お菜拵へも面倒也、内職婦人の時を惜むこと、金を惜むよりも甚しく候。煮染の行商はこれが為に起りて、中々の繁昌と聞及び申候。文明的に候。」とあるのは「内職」を「アルバイト」と置き換えれば、現代にも通用する「内職と人心」の問題に触れている。

第二十八信の「▲悠然と車上に構へ込んで、四方を睥睨しつゝ駆けさせる時は、往來の奴が邪魔でならない。右へ避け左へ避け、ひ

よるひよるもので往來を叱咤されつゝ歩く時は、車上の奴が闊癩でならない。どちらへ廻つても氣に喰はない。」にいたつては、もちろん「車」は人力車の時代であるが、現代のクルマ社会にも共通する実感がとらえられていて、読むものを複雑な感慨に誘う。

この鋭い觀察眼が自己に向けられたとき、第三十一信は次のような自嘲に満ちた筆致となつた。病氣の性質から「なまけ者」としか見られないハンディキャップを負いながら、何をする氣力もないときには浅草公園の見世物「江川の玉乗り」を見ることにしていたという緑雨の無感動な眸に、どのような人生の深淵が映っていたのであるうか。

「▲読むのいや、書くのいや、仕方がないと申す時あるを小生は感じ申候。なまけ者の証拠と存候。

この仕方がない時、江川の玉乗りを見るに定めたる事有之候。飛離れて面白いでもなく候へども、ほかの事の仕方がないにくらべ候へば、いくらか面白かりしものと存候。

たゞ其頃小生の一奇と致候は、満場の觀客の面白げなるべきに拘らず、面白げなる顔色の千番に一番、搜すにも兼合と申すやうの始末なりしに候。度々の実験なれば理窟は申さず、今も然なるべくと存候。

認め了りて此一通の段落を見るに、『と存候』の行列也、更に一つを加へて悪文と存候。」

三

「もゝはがき」を書くまでの緑雨の生活がどのようであつたかを知ることは、やはりこの最後の短文批評を理解する上に必要であら

う。

慶応三年（一八六七）の大晦日に、伊勢の神戸で生まれた緑雨・齋藤賢の一家は明治九年に上京して本所に住み、父の利光が藤堂伯爵の侍医となったため、本所緑町三丁目の藤堂家邸内に住んだ。「緑雨」の号は、この町名にもちなむ命名という。

上京してからは土屋小学校、東洋小学校、江東小学校、東京府立第一中学、同第二中学、明治義塾、明治法律学校などを次々に中途退学した。六つ歳下の次弟謙（東大理学部を出て地質学者となる）、十歳違いの末弟謙（東大医学部卒業の医師で、小山田三折の養子となる）に学業を続けさせるための経済的理由から、長男の緑雨が二十前に学問を廃せざるを得なかったものという。

また、十八歳だった明治十七年に『今日新聞』に入社して以来『自由之燈』『めざまし新聞』『東京朝日新聞』『東西新聞』『国会』『二六新報』『時論日報』『万朝報』と、ジャーナリストとしてもひと所に安住できなかった。

職場ばかりでなく、明治二十七年に本所から本郷の下宿に移って以後、居所も転々としている。駒込蓬萊町の奥井方、本郷弓町の高桑方、妹従が養女となっていた浅草向柳原の中村家、本郷丸山新町の下宿、本郷森川町の須藤方に住んだが、明治三十三年十二月に転地療養のため神奈川県鶴沼の旅館東屋にとまり、ここで緑雨の最期を見とった女性金沢タケを知った。

タケの出身地小田原に移ったのは明治三十四年四月で、新玉町緑新道から翌年十字町三丁目に移居したが、年末には東京にもどって浅草須賀町、三十六年五月から本郷千駄木林町に住んだ。十月には本所横網町一丁目十七番地に移り、ここで病歿している。

本所時代からの竹馬の友だった上田万年が「故齋藤緑雨」(『明星』明治37年6月号)で「緑雨は学校に於ても新聞に於ても、又自己の安楽の場所といふべき居住に於いても、猶家庭に於ても両親兄弟の關係に於ても、皆何れも円満充分のものといふ能はずして、三十八年の生涯を通じて、貧の為に、病の為に、戦ひしなり。……」と述べているのは友情にあふれた評言といつてよい。

しかし、緑雨にもっとも大きな打撃を与えたと思われるのは、明治三十四年五月に台湾総督府の技師として地質調査におもむいた次弟謙が、悪性マラリアで急死したことであろう。

緑雨が、代わりに台湾へ出向いて葬儀をすませた末弟の謙に「お前は小さい時から死に損ひの大病を何度もしたし、己は今一進一退の病気で困って居るのに、まだ死なずにゐる、それに一番丈夫な謙が一番さきに死ぬとは、運命は分らぬものだ」と述懐したことを、小山田謙「弟の記憶に残った齋藤緑雨の半面」(『文芸春秋』昭和4年10月号)は回想している。

末弟謙を養子に出さざるを得なかった緑雨にとって、期待をかけていた次弟謙の急死は、あきらめ切れないものがあったにちがいない。また、謙も明治三十七年二月に第二師団の野戦病院付軍医として入営したため緑雨の死に目に会えなかった。緑雨が上野駅で別れるとき「己はお前の帰るまでに死ぬ」と予言した通りになったのである。

四

木村毅「齋藤緑雨の一面」(『伝記』昭和11年7月号)で紹介された幸徳伝次郎(秋水)あての緑雨の手紙のなかに、次のように書き

出された明治三十七年二月十五日付け書簡がある。

「急ニ僕モ非戦論デモ書キタクナッタト申シマスノハ小山田が第二師団へ廻サレテ出征ノ途ニ上ルベキ命令ヲ受ケマシタノデ僕ハオ抱ヘノ医者がナクナッタ訳デス。

三十九度五分ノ発熱中ヲ車ト人トニ扶ケラレテ昨夜ヨギナク上野ステーション迄参リマシタノデ今朝ハ殊ノホカノ弱リ方デス。バカナ話デス他ノ見送ル人ハ僕ノ病氣ナドハ少シモ問ハナイ万歳ダノ大勝利ダノト喉ノ裂ケルヤウナ声ヲ出シテ居マシタ。……」

この手紙が書かれたのは「もゝはがき」が中絶したままのところ、緑雨は肉体的にも精神的にも最悪の状態だったにちがいない。

非戦論者秋水に「急ニ僕モ非戦論デモ書キタクナッタ……」と訴えているところに、いささか自棄的な口吻が感じられる。

秋水と緑雨が親しくなったのは、ともに『万朝報』の記者をしていた明治三十一年ころからであった。思想的、政治的立場は異なりながらも、二人は人間的な面でウマが合ったらしい。その親交ぶりは、秋水の妻だった師岡千代子の「斎藤緑雨の思ひ出」(『文芸春秋』昭和12年4月号)が、親愛感をこめた筆致で伝えている。

秋水が日露戦争の開戦に反対して、内村鑑三、埤利彦とともに『万朝報』を退社したのは明治三十六年十月であった。十一月には秋水は堺らと麴町有楽町三丁目に平民社を置き、週刊『平民新聞』を創刊している。そのころから再び秋水を訪ねてくるようになった緑雨が、療養費どころか生活費にも窮していたので、秋水は堺と相談して「もゝはがき」の執筆を依頼した。当時の事情について秋水夫人は「斎藤緑雨の思ひ出」で次のように述べている。

「平民新聞の創刊当時、私は臨時会計係を申し付けられて居た

が、緑雨氏の『もゝはがき』に、幾ら支払って居たのか記憶して居ない。平民社も頗る苦しかったから、孰れ大した金でなかったことは明らかである。しかし社からの送金を待ち切れずに、何時も本所の横網から有楽町の平民社まで、緑雨氏は病軀を押して足を運んで来られた。或る時の如きは、昨日少し金が入用だったので訪づねたかったが、僅かな足代さへなかつたので行けなかつたと、悲痛な手紙を寄せたことがある。私はこの頃の緑雨氏の姿を見るに付け、緑雨氏を御落胤だと聞いて居たから、幾度秘かに同情の涙を流したか知れない。……」

この「御落胤」云々は、秋水が結婚して間もない夫人に向かって、緑雨はある大名の落胤で「世の中を白眼視されるのも、当然受くべき学校教育を令弟に譲られたのも、総て皆なその為でもある」と真剣な口ぶりで二度、三度と告げたという秘話にもとづく。

緑雨の姪はるゑを母とした橋爪政成は『斎藤緑雨伝』(九州文学社、昭和39年刊)で、その説を否定し「近親者の間でも、そんなことを口にするのを一度も聞いたことはないし、彼は書簡や遺稿にも、ついぞそのような秘密を匂わしたものは見当らないので、どこからそんな誤解が生じたものか不思議でならない」と記している。

しかし、たとえ事実でなかつたにせよ、緑雨がひそかにそう思い込んでいたり、冗談めかして口にしただりしたことがなかつたとはいえないであろう。あくまで仮説とした上で、この観点から緑雨の言行や著作を改めて考え直してみる必要はあるのではなからうか。

五

緑雨がもう少し処世に心を用いたならば、晩年の生活はかなり違

つていたであらう。しかし緑雨の志操や矜持がそれを許さなかった。秋水が「緑雨に就て」(中央公論「明治40年10月号」)で、次のように述べているのは緑雨にとって知己の言といつてよい。

「彼は何処までもマジメな独立の芸術家たらんとし、政治家、策士、外交家らしき行為を潔しとしなかった、是れ実に彼れが晩年落莫悲惨の境涯に陥り、其死後にも沢山の謳歌者を有しない一理由である。緑雨を語るに就て一つ残念に堪へないのは、彼れが肺病に殺されたよりも寧ろ貧乏に殺された一事である、彼にして多少の財産、若くば一二の保護者あつて、相應の療養を加へたならば、猶若干の歳月を生延び、若干の作物を出すことを得たのは確かであつた、牛牛さんもエラかつた、紅葉さんもエラかつた、子規さんもエラかつた、梁川さんもエラかつた、死ぬまで寢床で書きつづけられた、が彼等は兎も角寢床の上に安んじて居られるだけの月給若くは収入があつたさうな、緑雨は夫れすらなかつたのだ、三十七年の春寒く、北風身を切るやうな晩を、骸骨のやうになつて咳入りながら、本所の横綱から有楽町まで、僅かの小遣ひを相談に来たのも幾度であつたらう、彼は其瞑目の二三週間前まで、重体の病苦を忍んで米代を拵へに歩いたので、今思ひ出しても実に涙の種である。：」

しかし緑雨がもう少し生き延びたとしても、新しい文学活動が期待できたであらうか。「もゝはがき」を読むと、日露戦争後に到来した自然主義の全盛期に影響力を發揮し得たとは、とても考えられない。

少年時代に藤堂家出入りの其角堂永機に俳句を学び、その紹介で仮名垣魯文の門下となつた緑雨は、明治二十年代の復古的氣運の強

い時代にこそふさわしい文人であつた。

緑雨と前後して世を去つた文学者をみると、明治三十五年九月に結核で歿した正岡子規は三十六歳、同年十二月に肺患で逝つた高山樗牛は三十二歳、三十六年十月に胃癌で死去した尾崎紅葉は三十七歳、四十年九月に胸を病んで亡くなつた綱島梁川は三十五歳と、いずれも四十に達しないうちに早世している。

これらの人々はみな、短い生涯ながら自己の才能を燃焼しつくり死んだ。同時代人で長く生きて作家活動が晩年まで衰えなかつたのは、幸田露伴ぐらいであらう。特に紅葉につづく緑雨の死は、明らかに文学史の一劃期を示すものであつた。

硯友社同人の広津柳浪門下で、ゾライズムを標榜する小説『地獄の花』を刊行して渡米した永井荷風は「西遊日記抄」の明治三十七年六月二十七日の項で、緑雨の死について次のように記している。

「故国より送來れる新聞雜誌は斉しく斎藤緑雨の訃を伝へたり。余は其の伝を読みて誠に人事ならぬ悲しみを覚えたり。緑雨が生涯の不幸は彼自らの性格のなせし処なりしと。あゝ江戸狹斜の情趣を喜び味ひたるものは遂に二十世紀社会の生存競争には堪へ得ざるものなる歎。」

はやくから為永春水の人情本に親しみ、落語家の弟子になつたり、外国語学校中退のまま、歌舞伎座の狂言作者や新聞記者をつとめたりした荷風にとって、緑雨は親近感の持てる文人だつたにちがいない。しかし、荷風は緑雨とちがつてフランス自然主義の影響を受け、その発祥地の土を踏むために、まずアメリカへ渡つた。「もゝはがき」を絶筆として病歿した緑雨の最期に、荷風は硯友社文学に代表される一つの時代の終焉を見たのではなからうか。